あるいて口よりあるいは万般のうちを吹いぶく予當時は眼病ゆ
えうつゝゆ物を看ることあたはざれども奇しき物ありうつゝ
衆人の云ゆ任せ我家みもとびく是と吹せく疼き眼
をうつゝ人井ひらき強て是を看るうつゝ其うつゝる圖數お
わくて件一ゆ或ち雲竜柵みけうつゝ長さ
二間の鎖をうつゝ二ツ輪ちがひ三輪遠ゆ掘鉢北斗くゝ猴頑
城ゝむ僧ちがひ山いろはゆけくゝの文字あと百般吹わけ
其中ゆ雲のかけくゝやひてふき輪みくゝそう橋と吹いぶく
て一個の仙人その橋をうつゝ空中へのぼり行あとおり
ちかくゝ

○措更屋於園

安永の頃東海道藤澤宿ゆ措更屋とゆくる邸家あり愛
園しゆくる婬女あり同國一の宮とゆくる處の農夫の子え
生質蕎麥切をものくて食する支おびくゝ徒然草ゆ見え
くる丹波の栗ゆひ娘の如くあり米の飯麦飯おゆどゆ嫌ひて食ば
唯蕎麥をもつゝ常の食くゝ且蕎麥切を制る事上手ゆ
て奇妙あり かゝ子異物あるゆ縁うくくて夫あくゝ十八歳の春ゆ
ア風と此措更屋へ給支ゆ来をるゆ爰ゆ相摸の國大山の石尊
くて大己貴の命と祭りくる山あり六月の始より七月の
末までゆ參詣の人おびくくゝ殊ゆ江戸人おりくゝ登山

しるるみぞ道中の邸家も大いふ繁昌して賑しかり
るいつしか這園が蕎麥と上手に制る麦名高くありく
江戸人はやく這家ふやぐり園ふ蕎麦と制させく食ける
麦流行り園すく蕎麦とまひすくむる麦上手ふく客
人一椀らひ終るくれ園もるう這方よく味く一椀の蕎麦と
投らくるる其蕎麦切あやはく旅人のまくある椀の中へ
落入こと奇妙ありて十人二十人の客ふくも蕎麦と強備ふ
るれ園らぐ一人ふく四方八方の客人のひくくる椀の中へ投
いるくに一ッくて把外くるふ落る事あく悉く椀の中
ふ入といるくかも畳の上あぐく溢る麦ありくら銀練くる

者ありるみぐくし園ふうぐく相撲の國々殊ふ蕎麦と好む風
俗ふくいづもの郷里の女ふくもよく蕎麦きりと客ふ椀
中へあげいるく麦と上手ふに別て這園ら殊ふ上手ふと然も
蕎麦と制るふ大いふ味ひよるくく江戸も又他國ふはきりて
蕎麦と好くくるれるべ這桔梗屋の園が麦と聞つく故意
るづ給くく這家ふくもよく蕎麦と制せく夕餉の代とあく
園が給麦ふく投らるると面白がりておのく競ひて桔梗
屋へやぐりるるみぐ太甚くんぐやくして外々の歌家一人
も客あれくきも這桔梗屋ら五十人六十人も止宿客あり
くくで邸家のあるぐも這園と家の福徳と称くてくらぐ

心と用ひ〳〵仕ひろう勘の如く繁昌する事八九年いつしか
這家の妻妬忌ひろう事おろうと園ゆいとねとはろ〳〵ろう
見ろう後旅人の宿止も些〳〵あうて不繁昌とあうろ家
みぞ再般在郷とさ〳〵て蕎麦と上巧ゆ制〳〵上手ゆあげ
入て給事ひろう女と抱ろもの一向郷のぐ〳〵ハ流行ざりし

○烈婦　阿雪　奴の小万

阿雪ハ大阪長堀平野屋何ぐ〳〵ぐ娘ゆて幼年ろう茂左
衛門町木津屋仁右衛門養女とある幼稚ろう書画を好ム
ようて狩淇園と師ろて学〳〵む雪元来怜利ゆ〳〵
一と関て万とろる才あり十二三ゆ〳〵書画および詩歌

とゝに父家富みまうせ万般の藝を学しむまび管絃も道
もつとも晴うゝび幼きゝれ母ゝ別を十五歳のゝれ父死去
に親族つどひ〳〵家督の夏いつゝそひあり雪ゝも是をうさ
〳〵思ひ家をはゞ夏を断アて亀嵜とゝくる二人の婢女をも
あひ或ゝれい実家ゝ旋びある時ゝ養家ゝ住居に雪生質力
強〳〵二人の婢女ゝ〳〵勇氣あり用ゝうゝ苍ゝあそぶのゝれ
も管び這二女を倡へり一年四天王寺彼岸會ゝ詣るゝ蛇坂
といくる處ゝ〳〵兇児三人来り雪ゝ釵替を偷んゝれ雪この
兇児們をゝ〳〵て右左へ投退ゝ〳〵再般ゝれ来ゝを待ゝ把
て投着ゝ〳〵亀嵜の二女ゝもゝ助て働ゝるゝゝど兇児們大

いゝ怕ゝゝ〳〵逃て去方をゝゝ〳〵是を看往来乃人々
おゝ〳〵き感ゝ〳〵ゝも何人の娘児ありやと問ゝ中に
〳〵知ゝる人ありて木津屋ゝむゝ雪ゝゝくるゝ
ありと傳ゝるゝそ是よゝ〳〵雪ゝ勇猛ある事を專ら世ゝ
ゝゝゝゝゝ當時道頻堀の歌妓ゝ尺八をゝ〳〵籟ゝる女
あり今名を忘ゝ年ゝ三十ゝ近ゝ〳〵ゝゝど太若やゝゝ装ひ
髪ゝ奴髷といくるゝのゝ結ゝ〳〵腰ゝかの尺八笛を挾てあ
ゝれゝるゝと衆人與ある夏ゝ云りてゝゝ〳〵〳〵近来難
出〳〵抽とゝくる藝子とゝんび時節戯場作者ゝの妓児と
べゝゝゝゝゝゝ別ゝのゝありゝ親地
雪と二人を一人ゝゝて奴の小万とゝくゝ力強き女の夏をの

て女尺八出入の業といくる狂言とて　細道頻堀市川座乃
芝居ゝ興行に當年寛延元戊辰の八月ゝ雪が袁と小
万と名と屋せ〳〵へ雪が実母を万といひて其子なれば小
万と〳〵成べ〳〵源平布引の滝ゝ小万と力強き
女ゝ是等ゝひて小万と名つけ〳〵と思ひ〳〵彼
戯場の招牌小万がすゞ〳〵奴髷ゝ腰ゝ尺八と〳〵〳〵る繪の
上ゝ雪が自賛と乞〳〵雪もと〳〵と思ひ〳〵も止事を
得ず詩一首自筆ゝ書〳〵

眼前不受綺羅紅　何願後身住上空
憂憤由来除國賊　千生万古護皇宮

是〳〵戯場の趣向ゝよりての作と見〳〵る當年雪九歳乃時
ゝ次の年ゝより雪皇都ゝのぼり縁をもとめ〳〵禁内ゝ
〳〵やぼ〳〵に詩歌管絃ゝ〳〵ると〳〵〳〵女伴ゝ妬まる
五年を経て仕と辞して中〳〵浪花ゝ出〳〵竟ゝ薙髪して
正慶尼と稱に義父仁ゝ〳〵氏と三好と〳〵び長慶の後孫な
ゝが故ゝ三好正慶尼と号して四天王寺の〳〵〳〵月江寺ゝ
住に支妻年ゝ正慶を一向門徒ゝ〳〵ども禅法と〳〵
て這寺ゝ居り本寺〳〵ゝ憤り〳〵ぐめ来り〳〵ども敢
〳〵び一年月江寺本尊開扉ゝて叅詣の人〳〵び〳〵
〳〵夕暮ゝおよびて急ゝ大雨ゝ〳〵ぐ〳〵許多の人犬〳〵

難為しかりしの磐端ちかくぎこて晴間と待と
いへども雨さしに止ず正慶急ふおわりぬ人と雇ひて長町
ふさしらせ傘數百本買きしらせ衆人ふたりと與て飯せ
くり盂蘭盆のころ紙ふハ千種の巻竹筒とおわり買りて色
亀嵜と俱ニ見とるづさく諸延の墓處とるづね跡しふ人
多き塚毎ふ人ちしぐ花と手向てありれくり其後ちくり月
江寺とひれくり難波村ふ閑居ればやうやくふして年老ぬ一
固の掐と造りて居室のうしくりれ正しふれ日毎巻と會して
酒と喫しむ文化元甲子年七十六歳ふて終りぬ菩提寺
木津村幽泉寺ふ雪亀嵜と三字と彫りしる碑ありしと奈

何うしくん今やあり這支実東都滝沢氏の話と浪花江
戸堀木屋何がしの藏書と校正して爰ふまるに正慶年屋何
がしが家ふあるしくるその文章あり
ちやうしく変の極月やはりふるしいりて難波の苅屋何
がしちに許ふかしがして新年を迎んとてあるやとう
るふ廿七八日ようり病ふふしく廿九日々大いふ悩されべ
繁子かしちう何らもやあるふど苦さ堪がと
しやがと暮たしく夜も寅ひとつ時つぞりあや
雑麦ありどもせよとはまがいそひとやらとれどのの
を喰がしいとあやまちうとて頓て身はうりやすう

んあるじの中ふふしくもびんあくやさしくせ
んうくあくて観念ひるうちち鐘の音とうはち声あ
ど関うくちやあくあるたのとしく立くぬるとも
あるやがるる身あると婆
せうう鐘ろうもとしまぬ年はは丈
暁の寒ふはもようひのあやふいや身うしむ苦さを
くくあのびてぬるとふあくうあき廣野うう
いがくはるがくと見わくせが今すぐ悩るあくちる
しちも打志をとうれべさくやうわくくも死るうや
かくてやりがち注べきとはひまがふうちわくべうの

もあらいひはらぐ〻こゑおう〻う閔えゑをびいりあるみう
とうりさけ見るふ東の窓ら〻考う〻と朝日のさ〻
入るると見てそぐめて夢はさめる支ど覚えそ死ら〻
ね身の本意かさいそんこう〻きう〻

未来うとやりしゆ〻ふはのきり日うけ

命終とのう〻念じ〻奉る老ど身ふをてはぐかりて七十
餘六のらくひつりれるはう〻ふき宿業のつ〻あさうう
ね娑婆の因縁ふやとかぎりあう〻うあ〻かは

う〻ふ世ふはう〻あじ〻人て何ゆやんおひど身あ〻う
我どそぐ〻

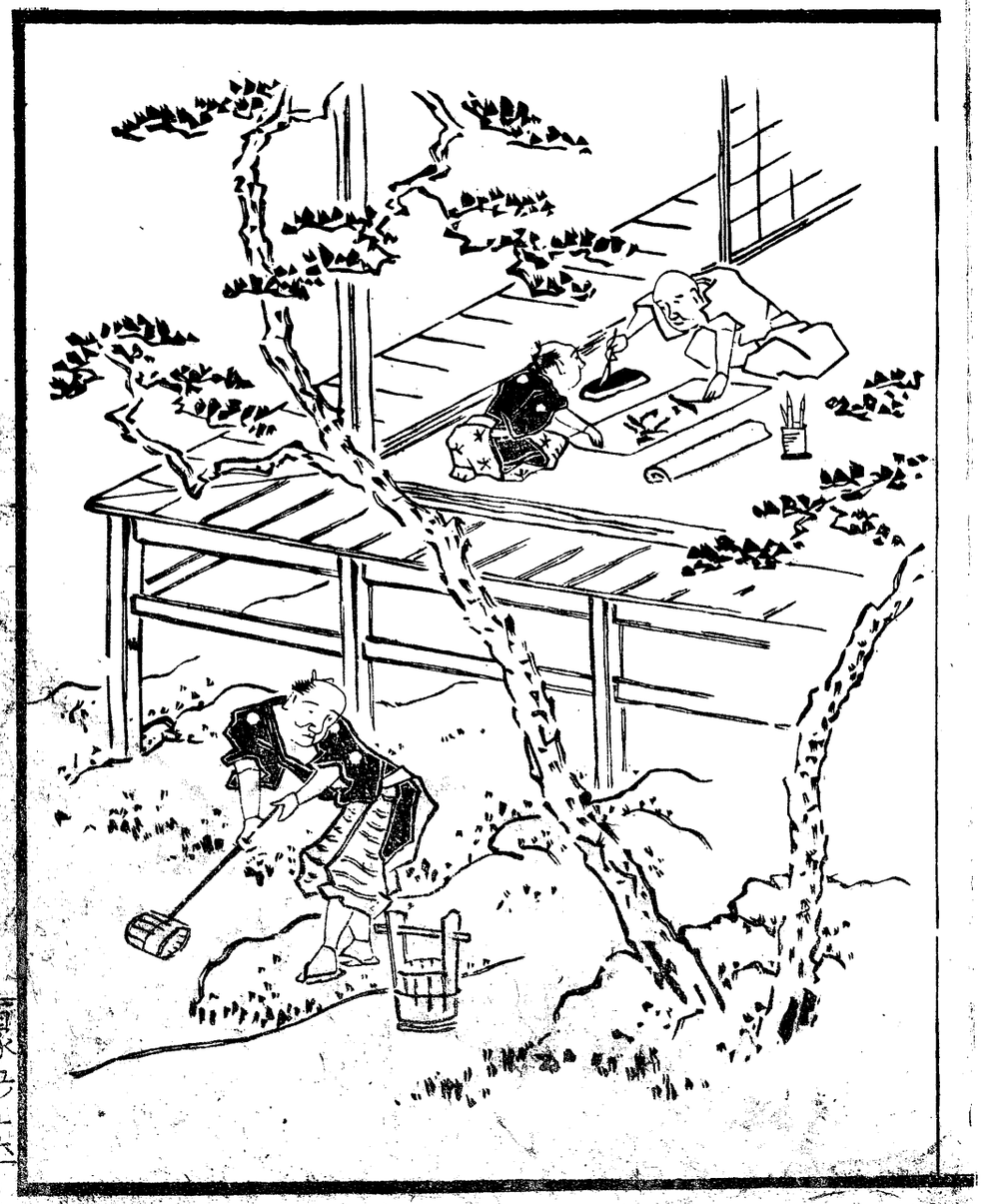
浪花揚枢蘆主人の藏書ら〻寫に都て奴の小万男きりん
といふ説ら戯場ふ〻はら〻設〻支ふ雪ふ夫ふ見し
支両三度あるあり唯心ざふ雄々しく紀と詩哥管絃の
道ふはぐ〻丈〻とりて異あり〻に実母楠公正成の後胤
あり〻と雪も常ふ菊水の紋と着〻る衣服と用ひ〻り天
王寺ふ〻楠公の年回法要とつとめ或ら難波の瑞竜寺ふ〻
関白秀次公の二百回の追福とい〻とあ〻あじ〻〻り都て往古の
人の追福といゆ〻あむ支あど好〻〻るとど其事無ふ若干
黄白とあけ打許ま支の僧と供養〻〻伶人と迎へ楽と奏〻

あどしるるあど竟ふ家産大いふ裏へしるしるる人物云々

○峻山和尚

峻山や阿刄三好郡農夫来代禎左衛門といふる者の子あり幼稚より紀ちり出家して河内の國高抜高貴寺の茲雲比丘の弟子ふありて学文に後ちて高野山新別所圓通寺密門子ふ律とうけ阿刄ふかへりて徳島勢見ふ住に寺号今后隠居して同國南方日和佐藁王寺ふ閑居に博識ふて詩をしるし最能筆あり別号閑々子ちて換水和尚とも云常ふ手水鉢泉水あしの水と換るしを好て旅人来ち毎ふ

手つしへて水とかうる支あり今換し水を外人来ちへふ換ちる敢て潔癖といふふあしに唯没おれの水ときしふ見ちしたる一紙書と需る者ち一瓶の水と没べしと書て門ふちり置ちり這和尚しに謂ふ支とちしたる勢見ふ閑居のちれいち止支あれ君峻山ふ菴と訪ひ一紙書をそのひろれば峻山領兼てやうて硯といふ万望墨ともしし給るべしと云て指出しる君註方あして硯ひきうて墨ちり給ひる隨後の士衆おど後きちし出て見と摺ちり峻山渡帋をひちれ筆とちして書んとしるるれ風の吹入ちれば何しどちちと押て給れしり



君まゝ止支と得ば紙の端とおさへて居ひしそ斯て
自作の詩一首ゝ終り印画あるべし何
ゝも押て御持あるべしと云ておしいゝ置と構
ゝ別ゝ斯するふうゝ貴賤の差別ゝ
誰ゝも皆圓しやふ心隈ゝ
有る亦一日同國三好郡中西村高尾又兵衛と云人峻山
の巷ゝ来り渡紙二三枚書てもひやゝ懐裡より紙二つ
ゝる物といゝ是をいゝ酬謝ゝ待ゝいひて出
ゝる此紙ゝつゝ物ゝ此国の銀札ゝ考べて此国金銀と
つむ支ハれゝ大うゝ銀札ゝおゝふ事ゝ
ら斯様ゝるゝ紙物ゝ止ゝて下さゝと云て筆の軸